

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：34314

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720244

研究課題名（和文） 近代日本の地域社会における歴史認識に関する研究—明治維新を対象とする—

研究課題名（英文） the study on history recognition of Meiji Restoration in the modern Japanese society

研究代表者

笹部 昌利（SASABE MASATOSHI）

佛教大学・歴史学部・非常勤講師

研究者番号：20399059

研究成果の概要（和文）：近代日本における歴史認識、特に幕末の「志士」に対する叙述と顕彰のあり方から、幕末維新という時代に対する思考について考察した。旧大名家史料群のなかから、「志士」と呼ばれた人々によって書かれた書状、記録を調査し、「志士」像の捉えなおしをおこなうとともに、近代に編纂された郷土史などの内容を考察することにより、どうして近代日本の地域社会において「模範的人物」と意義付けられるのかを明らかにすることを目指した。さらに、これまで明治維新史研究に利用されてこなかった京都府下の社寺に所蔵される史料を利用し、幕末維新时期における社寺の政治的意義について考察した。

研究成果の概要（英文）：The recognition of history in modern Japan is considered. It inquires especially about the thinking to the time of the state of the description to a "志士", and celebration to the end-of-Edo-Period Restoration. From the historical-records group of the old Daimyo-family, a letter, a diary, etc. which were written by people called the "志士" are investigated, and it performs recatching a "志士" image. Moreover, by considering the contents, such as local history edited in modernization, aims at showing clearly why they are considered to be "model persons" in the community in modern Japan. Furthermore, the historical records possessed by the shrines and temples in the Kyoto Prefecture which were not used for the history research of the Meiji Restoration are used, and the political meaning of the shrines and temples of an end-of-Edo-Period Restoration term is considered.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2010年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2011年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：志士・明治維新・歴史意識・土佐藩・薩摩藩・鳥取藩・会津藩・弘前藩

相国寺・出雲大神宮・地域社会・歴史編纂

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本近代の地域社会における近代史料の検証を通して、近代国家の形成過程として考察・蓄積されてきた明治維新史研究を問い直すことを目指して開始されたものである。わが国においては、明治維新ないしは幕末維新という時代は、関係する人物の偉業によって成る「勤王史」として解され、明治末から昭和戦前にかけては揺るぎない建国神話として位置づけられてきた。これは、明治政府成立の正当性を説明することに重きが置かれたためである。ゆえに、あらためて「志士」と呼ばれた人々を捉えなおすべく、その足跡を各地に伝存する近代史料（書籍・個人所蔵史料・郷土史編纂時に収集された史料等）から個別に分析した研究は実はほとんど存在しない。

2. 研究の目的

高知市域、鳥取市域、鹿児島市域、京都府地域をおもなフィールドとして、歴史資料収蔵施設や個人によって所蔵される明治維新について編まれた書籍、新聞などのメディア、「郡誌」および個人の伝記などの編纂に要された資料を調査し、各地域における歴史認識、顕彰運動の実態について明らかにする。

また、京都府においては、臨濟宗相国寺（京都市上京区）、出雲大神宮（亀岡市千歳）所蔵の史料を調査し、幕末京都の政治とのかかわりや、近代における社寺の存在形態に関する考察をおこなう。

3. 研究の方法

(1) 旧大名家史料の調査および研究

薩摩藩島津家、鳥取藩池田家、肥後藩細川家、弘前藩津軽家、会津藩松平家、土佐藩山内家をもその対象とし、同家と幕末京都との政治的関わり、宮廷社会（公家社会）との関係がうかがえる歴史資料を、史料所蔵機関にて写真撮影・データ入力をおこなう。出張をとまなう写真撮影およびデータ入力については、研究協力者として平良聡弘（花園大学文学部非常勤講師）の協力を得た。

(2) 明治維新関係書籍・文献の収集

各地において「志士」顕彰を目的に編纂された冊子の収集、購入を積極的におこなう。また、国立国会図書館が運営する近代デジタルライブラリーについても、関連するデジタルデータの保存と整理をおこない、パソコンソフト「File Maker Pro」を用いて対象画像

が即時検索できるデータベースを構築する。

(3) 社寺所蔵明治維新史料の調査・研究

本課題採択以前より調査を依頼していた相国寺、出雲大神宮の幕末維新および近代史料の撮影および史料整理をおこない、社寺と幕末維新との関係性について論じた研究を発表する。

4. 研究成果

(1) 旧大名家史料の調査および研究

① 薩摩藩島津家関連史料について

旧薩摩藩士市来四郎の日記、書簡および論策について、鹿児島県歴史資料センター黎明館において調査をおこなった。市来四郎は、幕末においては砲術方掛、集成館掛など技術職を歴任し、維新後は島津久光の側近として島津家の歴史編纂を旨とする薩摩関係史料の収集にあたった人物である。同館には、故大久保利謙氏旧蔵史料が所蔵され、そのなかから安政年間・文久年間の日記を撮影した。撮影した日記は、市来の集成館在勤時や江戸詰の折の事実がうかがえる情報史料であり、今後の薩摩藩の政治史研究に大いに活かせる史料である。さらに、鹿児島大学附属図書館所蔵「玉里文庫」中の市来四郎書簡についても、撮影、解説をおこなった。

維新後、市来四郎がおこなった歴史編纂事業に関わる資料については、前出の黎明館に所蔵されるが、「鹿児島県史」編纂史料として収集された性格から、個人研究の目的で撮影することは認められず、閲覧および必要部分のデータ入力によって対応した。今後の公開が待たれる。

② 鳥取藩池田家関連資料について

鳥取県立博物館に所蔵される鳥取藩政資料より、近代における歴史編纂事業に関わる調査をおこない、池田侯爵家史編纂者梶川栄吉に関連する史料および著作の収集、整理をおこなった。

また文久3年（1863）8月、京都、本圀寺において発生した大名側役殺害事件（本圀寺事件）の首謀者20名の処分（「因幡二十士」）に関する史料、文献の収集をおこなった。「二十士」に関しては、鳥取県日野郡黒坂にある泉龍寺を訪ね、同寺に伝存する遺品の閲覧とともに、関連文献の撮影をおこなった。

③ 肥後藩細川家関連史料について

熊本大学附属図書館に寄託所蔵される永

青文庫中、幕末の同藩による京都守護に関係する史料の撮影とデータ入力をおこなった。同史料群によって近代に編纂された著名な資料『改訂肥後藩国事史料』中、文久2年下半期に限り、明治期に編まれた「肥後藩国事史料稿本」との内容の照合をおこなった。「稿本」には、膨大な情報量を有する資料として研究に汎用される『改訂肥後藩国事史料』の数倍の情報記載されることわかった。このことは、テキスト・クリティークが未だ不十分であるという明治維新史研究に介在する問題点が浮き彫りとなったのみならず、肥後藩細川家を素材としたあらたな政治史研究の可能性を裏付ける成果となった。

④ 会津藩松平家関連史料について

会津若松図書館において、会津藩士関係の書籍の複写および旧藩士家文書の撮影をおこなった。一般雑誌を含めた地方史研究において会津藩を素材、対象とする研究数に比して、伝存する歴史資料が僅少なことで、近代における維新の記憶が人びとに語り継がれ、「語り」を媒体として歴史観の形成がうながされていることなどが、改めて確認された。今後さらに調査をおこない、地域社会における歴史観の形成について考察を深める必要がある。

⑤ 弘前藩津軽家関連史料について

弘前市立弘前図書館および北海道立文書館に所蔵される津軽家文書、特に縁家である近衛家関係書類（書簡、記録）の撮影をおこなった。同藩の京都守護に関係する史料についても調査対象とし、同史料から松前警備などの軍役の執行で疲弊する藩側の意識を読み取ることができた。今後、津軽家の幕末政治とのかかわりを、前出の薩摩藩島津家を含めた近衛家との縁戚ネットワークを踏まえて考察し、新視角を提示しようとする。

⑥ 土佐藩山内家関連史料について

高知県立歴史民俗資料館に寄託所蔵される「島村衛吉関係資料」の撮影、考察をおこなった。島村は、土佐藩山内家の有志集団、土佐勤王党に属した人物である。武市瑞山および中岡慎太郎の来簡を含めて、土佐郷土の政治活動の実像を明らかにしうる史料群であるといえる。

また、同館寄託所蔵の「長岡謙吉関係資料」の閲覧、データ入力をおこなった。長岡謙吉は土佐藩海援隊士であり、坂本龍馬とともに「新政府綱領八策」も関わった人物であるが、同史料群の調査によって、「綱領」案の作成を長岡が請け負ったものであることを確認できた。

さらに、同館所蔵の「平井・西山家資料」は、土佐勤王党、平井収二郎関係史料群であ

り、平井の著作、日記、書簡、平井収二郎没後の顕彰のありようがうかがえる史料である。写真撮影、データ入力をおこなった。

(2) 明治維新関係書籍・文献の収集

「志士」顕彰を旨とする近代日本の郷土史について、高知県下にその対象を絞って調査、研究を進めた。高知県立歴史民俗資料館に寄託所蔵される「寺石正路関係資料」は撮影が認められず、調査機会を重ね、閲覧、データ入力に対応した。『南学史』・『土佐偉人伝』・『土佐名勝志』などの単著や高知県下で編纂された多くの「郷土史」編纂に携わってきた寺石自身の記録、日記を読み解き、近代の歴史家の歴史観や、地方観について考察した。

また、高知県立図書館に所蔵される「坂崎家文書」は、自由民権運動家としても活躍した、近代における坂本龍馬の認識の基礎を作った『汗血千里駒』の作者坂崎紫瀾の関係史料群であるが、そのなかから彼自身が記した調査メモ、書簡類を撮影した。

この他、幕末「志士」について編まれた戦前の刊行物については、購入分も含めて、スキャンをおこない、PDFデータとして保存し、パソコンソフト「File Maker Pro」を利用し、データベースを作成した。

文献情報のみならず、坂本龍馬および土佐勤王党関係者に関する史跡や、史跡に所在する記念碑を調査し、建立主体、建立意図などについて考察した。

(3) 社寺所蔵の明治維新史料の調査・研究

① 相国寺所蔵幕末維新史料の研究

相国寺所蔵の「相国寺文書薩摩藩京都屋敷関係史料」は、これまで幕末維新史研究において大いに利用されてきたような、大名家を正当化する性格を有する史料ではなく、大名家の政治運動を受ける形となった組織によって作成された客観性の強い史料であり、従前の幕末維新史の性格付けを批判するにたる情報が盛り込まれた史料194点からなる史料群である。この史料によって、おおよそ以下のことが判明した。

最初に、島津久光による政治主導を補完する京都における政治行動の意義についてである。島津久光は、文久2年(1862)4月の「率兵上京」以後、京都と江戸を移動し、江戸から帰京の後、鹿兒島へ帰国、翌3年3月に上京後、即座に帰国、同年10月上京の後、翌元治元年(1864)3月、帰国する。久光の帰国は、薩摩藩の中央政局からの後退であると考えられてきたが、久光の京都不在時においても、久光側近からなる京詰の藩士たちは、相国寺境内地「二本松」の借用と屋敷地造営に向けて、たゆまぬ努力を重ねており、不日に予想される久光の上京に耐えうる施設の完成が目指された。

2 つめに、大名京都屋敷の契約についてである。これまで大名屋敷の設置には、徳川公儀からの「預地」として拝領するケースほか、屋敷地の所在する町と不動産契約を結んで、購入するといったケースのみが知られてきたが、薩摩藩二本松屋敷（現、同志社大学今出川キャンパス）はこれらとは異なり、相国寺に所在した塔頭の敷地と、門前町を 20 年契約で賃借し、屋敷地に生じる様々な不都合の一切を薩摩藩側が負担するという条件のもと設置されたものであることがわかった。

3 つめに、同屋敷が大名ではない政治主体、島津久光のために造営された屋敷であること。大名家の京都の拠点には、藩が所持し管理している「京屋敷」と、大名が宿舎として用いる「本陣」が所在することが多い。「本陣」には、寺院境内などの広大な地所で、大名家の縁ある寺院が選ばれたが、相国寺二本松屋敷は、いわゆる「京屋敷」とも、「本陣」とも異なる曖昧な意義づけの屋敷である。それは、大名では政治権威者によって利用される京都の拠点として、さらには、久光の息のかかった大名側近衆（大久保利通、西郷隆盛ら）が拠点として用いることができる屋敷地で、本陣と従来の京屋敷との機能をあわせ持っている施設であった。

このような曖昧な性格は、京都に出てきて活動する、いわゆる「志士」と呼ばれる人々を許容させた。このことは、すなわち慶応 2 年（1866）正月、薩長同盟の成立を既定づけることになったと考えられる。

②出雲大神宮所蔵近代史料の研究

京都府亀岡市の出雲大神宮に所蔵される史料を調査、研究し、近代の地域社会における神社の存在意義について考察した。出雲大神宮は、戦前、「出雲神社」と呼称され、近世以前は「丹波一宮」として、格式の高い神社であった。研究において明らかになったのはおおよそ以下の点である。

最初に、明治元年（1868）の神仏分離政策への対応について。廃仏毀釈運動の際、境内にあった「神宮寺」が取り払われ、同時に寺内にあった仏像四体が、中村、出雲、小口、江島里といった出雲社の氏子圏の村々の寺院へそれぞれ引き取られ、のち古物商に売り払われたこと。さらに、明治 6 年（1873）には社内にあった湯釜 14 個、社殿に掛けられていた「鰐口」大小 4 点が売却されたが明らかになった。比較的穏やかであったと解される丹波地方の神仏分離政策の実情がうかがえよう。

2 つめに、明治維新期の神官を取り巻く状況について。出雲神社神主廣瀬伯耆家の当主、廣瀬正備の「出雲神社神勲」が、明治 6 年の京都府達により一旦解除され、同日に教部省

への出仕と「丹波国桑田郡出雲村出雲神社権禰宜兼少講義」に任命され、あらたな神道体制に編入されていくこと。さらに、教部省管下となるも、神主は配備されず、前近代同様の運営がなされたが、明治 6 年 9 月、教部省より「神札」が配与され、あらたな神社業務が開始されたこと。明治 7 年に白峰宮、吉田神社禰宜であった乾満昭、明治 9 年 1 月には、和歌山県出身、小島備源が宮司に任じられ、近代の出雲神社の運営組織が完成するに至ったことを明らかにするとともに、財政的に逼迫したなかで地域社会を教導するべく奔走する神官の姿を「社務日誌」より読み解き、論じた。

3 つめに、出雲神社と近代の戦争についても伝存する史料から考察を深め、「国威宣揚」と「神道教化」の両面で神社において機能しといったこと。

前近代において地域に根ざした神社形態をとった出雲神社は、日露戦争後に全国的に展開された地方改良運動に際して、小学校や青年団といった教育機関と結びついた。「戦時」の日本において、市民が共有できうるシンボルとして、戦地において取得された「戦利品」が明治 29 年（1896）3 月と明治 40 年（1907）7 月の 2 度に渡っておこなわれた。

4 つめに、近代の社会教育の場としての神社について、大正 11 年（1922）、「国民精神の基調たる敬神崇祖の感念を振興」のために、修学旅行に際する出雲神社参拝を呼び掛けていること。これに、丹波地方の各小学校の他、大正 11 年から昭和 9 年（1932）までに、総数 178 校（内、京都帝国大学旅行部 1 例、京都師範学校 2 例）、のべ 18765 人の生徒が教員引率のもと参拝している。

昭和 8 年（1933）3 月 2 日には、出雲神社が企画する「一ノ宮運動会」が神社境内において盛大に開催され、「百米競走」や「他村青年リレー」といったプログラムに興じた。このように出雲神社が地域社会の児童、青年に対して、地域の社会教育を主導する立場となっていることがうかがえる。

5. 主な発表論文等

〔図書〕（計 6 件）

笹部昌利、幕末動乱の京都と相国寺、相国寺教化活動委員会、2010、151

笹部昌利、他、出雲大神宮史、出雲大神宮史編纂委員会、2010、147

笹部昌利、他、近江日野の歴史第 8 巻、日野町、2010、587

笹部昌利、他、幕末維新人物新論—時代をよみとく 16 のまなざし—、昭和堂、2009、321

笹部昌利、他、新修豊中市史通史編 2、豊中市、2009、899

笹部昌利、他、東近江市史愛東の歴史第 3 巻本文編、東近江市、2009、601

6. 研究組織

(1)研究代表者

笹部 昌利 (SASABE MASATOSHI)

佛教大学・歴史学部・非常勤講師

研究者番号：20399059